

マレーシア社会還元プログラム(平成18年2.17~18) アンケート結果(回収:JOCV24名、SV6名)

- これまでに日本で開発教育ワークショップに参加したことがある・・・ある3名 ない27名
- 「開発教育」という言葉を知っていた・・・はい14名 いいえ16名
- 「開発教育」に関心があった・・・はい12名 いいえ6名 どちらともいえない12名

1. セッション1&2について(「開発教育入門」&「開発教育教材体験」)

- (1) 大変参考になった15名 参考になった11名  
まあまあ参考になった4名 あまり参考にならなかった0名

(2) その理由は何ですか？

- ・漠然としていた“開発教育“だったがその意義と役割、重要性が見えてきた。
- ・マレーシアの教材だったため、活動と関連付けて考えることができ、興味をそそられた。
- ・何しろ、初耳の言葉が多く、もう少し時間があればもっと掘り下げられたと思う。

2. セッション3について(「協力隊体験社会還元の具体例」)

- (1) 大変参考になった9名 参考になった10名  
まあまあ参考になった10名 あまり参考にならなかった1名

(2) その理由は何ですか？

- ・参加型であったため、他人の意見を知り、自分の体験を客観的に見る機会になった。
- ・写真を使って体験を伝えるときの手法や問題提示の仕方を学ぶことができた。
- ・参考になったが時間の関係で、自分の中で消化するにいたっていない。

3. セッション4&5について(「一人一人の体験を形にする I・II」)

- (1) 大変参考になった20名 参考になった4名  
まあまあ参考になった6名 あまり参考にならなかった0名

(2) その理由は何ですか？

- ・体験談をするときの準備・構成の仕方がわかった。残りの時間を有意義に過ごしたい。
- ・テーマと写真の選択法、メッセージを伝える手法は大変興味深く、帰国後の社会還元のイメージが湧いた。
- ・「10分体験談」の相互評価の時間があつたので、今の活動をふりかえることもできた。

#### 4. セッション6について（「地球生活体験学習教材体験とふりかえり」）

- (1) 大変参考になった13名                      参考になった7名  
まあまあ参考になった9名                      あまり参考にならなかった1名

(2) その理由は何ですか？

- ・私たちはこの教材のように、多様な価値観を体験から伝えていくことができると知った。
- ・協力隊員としての自分と現地の人との触れ合い方について考えさせられた。
- ・単なる体験発表ではなく、実際にそこに住んだことがない人たちとも一緒に考えられる教材っていいなあと思った。

#### 5. 2日間のワークショップ全体に関し、ご感想、ご意見、ご質問等をご自由にお書きください。

- ・私は、現職参加事前研修、訓練所での自主講座で土橋さんの話を聞いて、赴任しましたが、派遣中に受講できて現地とのつながりが見え、より明確になりました。学んだことは任国でも活用できるので、活動の質そのものが充実しそうです。
- ・参加型のセミナーだったので、隊員同士とはじめていろいろな話ができ、自分の考えを深化させるいい機会となり、有益でした。
- ・JOCVと話ができて仲良くなれてよかった。(SV)
- ・おぼろげながら社会還元の意義が理解できました。でも現時点では自信がないし、教育への熱意もさほど高くありません。でも自分としては今後も向き合っていきたいです。

#### <セミナー終了の4日後、受講者からのメール>

件名:ワークショップの後、考えたこと 発信日時:2006/02/21(火) 22:53

土橋さま cc:マレーシア事務所のみなさま、同じグループのみなさま

マレーシアの生活はとても快適で、最近頭をあまり使っていませんでしたが、2日間のワークショップで心が刺激され、今とても良い状態です。

2日間のセミナーのルールを作りましょうという問いかけは、意外性だけではなく、その社会固有のルールや価値観があるという認識に至れば、とても意味が深いですね。

教材の「セネガルのファールさんの話」で、隊員が“へー、そういう考え方もあるのか”と認識したことで、今まで悩んでいたことが氷解し、彼の活動がやり易くなったことと思います。

私も今まで社会により価値観の違いがあることはなんとなく分かっていましたが、それをネガティブに見るのではなく、その必然性を理解することから始めたら、もっと良い活動ができると思いました。

まずは、色々なアイデアをいただいた御礼まで。

シニアボランティア 須山

ニジェール社会還元プログラム(開発教育講習会)受講後  
追跡聞き取り調査報告

2006年2月9日

ニジェール駐在員事務所

報 告: ニジェール事務所付け シニア隊員 木村 高江  
ニジェール元調整員 高橋 ゆう子  
実施日時: グループA 平成17年7月6~7日  
グループB 平成17年7月10~11日  
両グループとも全日(9:00~12:00 & 14:00~16:00)  
対 象: 青年海外協力隊員 55名&事務所スタッフ5名

**講習受講半年後(2006年2月現在)の隊員の声**

(口頭インタビューにて、当時の受講者であり、現在ニジェールで活動する隊員 35名中 15名から得られた回答)

- ・ 帰国後に途上国での経験を話す機会が多いことを知り、伝えるために必要な情報とはなにかを考えるようになった。
- ・ 現地の人の生活を深く掘り下げて知る、知りたいと思うようになった。
- ・ これまでなんとなく漠然と写真を撮っていたが、日本で伝えるための写真、ニジェールの生活が伝わる写真、人だけでなく、ニジェールならではの「もの」も撮るようになった。
- ・ 講習を共に受講し、既に帰国した隊員から、小学校等でニジェールの話をしていることを聞き、自分ならどのような内容を話すかとイメージするようになった。
- ・ ニジェールに慣れてしまい、疑問に思わなくなってきたこと、これ(もの)は、どこから来たのかが気になるようになり、現地人に多くの質問をするようになった。
- ・ 写真を撮るときに、記念写真的なものでなく、被写体の自然な表情を撮れるよう注意するようになった。また、ニジェール人の写真を撮る際の相手の表情等で、自分の存在がニジェール人の間で、どのように受け入れられているかを考える(知る)ようになった。講習会でのセネガル隊員が現地人の食事の風景を写した1枚の写真が印象的で、自分もニジェール人が構えない、自然な写真が撮りたい、撮れるような関係を築きたいと思っている。特に人物写真については、撮れた写真によって自分がどこまで現地に溶け込んでいるのか、受け入れられているのかという自分自身の1つの物差しになっており、帰国後、ニジェールでの経験をぜひ話したいと思うようになった。
- ・ 活動とは別で、ニジェールの子供たちに身近な素材を使って日本の子供たちの生活紹介を考えている(子供にとって現実味のない国の面積比較等でなく、子供たちにとって身近な食事、兄弟、学校の話から紹介したい)。
- ・ 講習会以前から、もともと興味のあることはなんでもニジェール人に質問をしていたが、さらに知っておきたいと思うようになった。帰国後、体験談をする機会があることを知り、まだ詳細なイメージはわいていないが、そのような機会があることについてもアンテナを張っておきたいと思うようになった。
- ・ 帰国後、途上国での経験を話す場があるということを知り、これまでなんとなく話せるような気になっていたが、受講後、伝えるということが意外と難しいと知り、ニジェールにいる間に

伝えたいトピックについて自分自身が掘り下げて考える必要があると思っているが、実際の行動にまでは至っていない。

- ・ 特別な変化はないが、受講して帰国後話す機会が多くあることを知ったが、伝えたいことはたくさんあるけれど、自分に伝えられるかどうか？と少しプレッシャーに感じている。
- ・ ニジェールの生活に慣れてしまって、帰国したら質問を受けるであろうなんでもない日常のひとコマについての写真を意外と撮っていないことに気づき、現地の生活がわかるような写真を努めて撮るようになった。
- ・ 広い意味での開発教育と、その中のニジェール体験を伝えることの意義について、これまでまったく知らなかったが、自分も活動を終えた帰国後にそのような機会があるのかな…ということが頭の片隅に残っている。
- ・ 特別、帰国後の発表の場を想定してなにかしているわけではないが、帰国が近づき、自分にも実際に話をする機会が来るのだなあということがなんとなく頭にある程度である。
- ・ 受講後、特別な行動変容はない。
- ・ 個人的に、自分自身の帰国後の任国体験談は、小さな子供に対しては、自分の考えを押し付けてしまいそうだと感じたこともあり、ある程度同等にディスカッションできる高校生やそれ以上の年齢層に対して行いたいと考えるようになった。

#### 講習会実施後のニジェール事務所としての取り組み

##### 1. 新隊員赴任前オリエンテーションに開発教育の時間を設置。

- ・ 開発教育概要、活動中および帰国後の社会還元活動の必要性、JICA ボランティアの目的のひとつである社会還元について説明(帰国後の国際協力出前講座等、体験談のニーズについても意識した生活、活動)
- ・ 講習会を受講した先輩隊員による模擬授業(「10分間メッセージ」の発表を含む)と受講後の意識変容についての説明
- ・ 講習会の様子を撮影したビデオを上映

(感想)

新隊員は今後の任国での生活や活動に対して高いモチベーションをもっているため、平均して開発教育への関心も高く、オリエンテーションでも反応がよい。また、事務所だけでなく、同じ立場の先輩隊員から具体的な話を聞くことで、イメージが沸きやすく、自分でもやってみたいという気持ちが高まるようである。また、先輩隊員にとっても、あらためて見直す、知るきっかけになっており、今後も継続する予定である。

##### 2. 開発教育資料の整理

- ・ 講習会ビデオ、講習会レジュメ、開発教育関連資料、開発教育キットを整理し、隊員がいつでも閲覧、利用できる環境を整備した。

##### 3. 帰国隊員へのリマインド

- ・ 帰国隊員と事務所との面談時に、改めて帰国後の開発教育への参加についてリマインドし、日本で受講できる開発教育講習会や実施団体について紹介した。 以上

# 社会還元プログラム(開発教育ワークショップ)プログラムメニュー

(作成:JOCA土橋05.6)

	A	B	C	D	E	F	備考
目的	街や市場など、物質的流通や人的つながりのある場所を通して、現地の生活文化的視点で開発教育の視点で分析する。	海外ボランティア経験の社会還元具体例を通して、伝え手としてのスキルの向上を図る。	海外ボランティア経験を基にした開発教育教材の体験を通して、両国双方にとつての社会問題という視点から、社会還元することを学ぶ。	現地の抱えている課題を整理・分析し、その解決に向けて話し合う。	開発教育ワークショップの目的を共通理解し、開発教育や開発教育支援事業の意義と効果について認識を深める。	現地の事象を素材とした教材開発案を作成する。	どの講座にも「開発教育概要」の講義が入りますが、講義とワークショップの割合は目的と対象によって異なってきます。
内容	スタディワーク	スキルアップセミナー	教材体験ワークショップ	参加型開発の手法	JICAにおける開発教育	教材作成素材調査	
時間	3～5時間	5時間	5時間	3～5時間	3時間	1～2日	
主な対象	JOCV	JOCV・SV	JOCV・SV	カウンターパート & JOCV・SV	JICA事務所員	講師 & JOCV・SVの希望者	

## <その他>

時間は、最少所要時間を提示しています。基本的に「ワークショップ」は3時間以上が望ましいです。連日となると、打ち合わせや準備時間を考えると1日3時間のワークショップが妥当です。

## <確認事項>

- ①開発教育とは公正な地球社会作りを目的とした教育活動、開発教育支援事業とはJICAボランティア経験の知見の還元と市民参加の事業。JOCAの地球生活体験学習はその両方を成立させているものです。JICAボランティア経験を素材とし、開発教育の参加型手法を取り入れた教材を開発しています。ですから、その教材を体験することにより、海外ボランティア経験をリソースとして開発教育の目的や手法を学ぶことができます。
- ②ファシリテーターが現地視察や派遣現場(JICAプロジェクトサイト及びJV/SV派遣先)を見学し、現状把握をした上で実施したワークショップのほうに、主催者及び参加者の評価が高かったという初回ニエールでの経験をふまえ、現地見学は適在適所に入れていただければ助かります。また、日程の最後にはスタッフと実施報告・評価、課題を整理する時間を設けていただきたいと思います。

図1 サラワク周辺図とボルネオ島

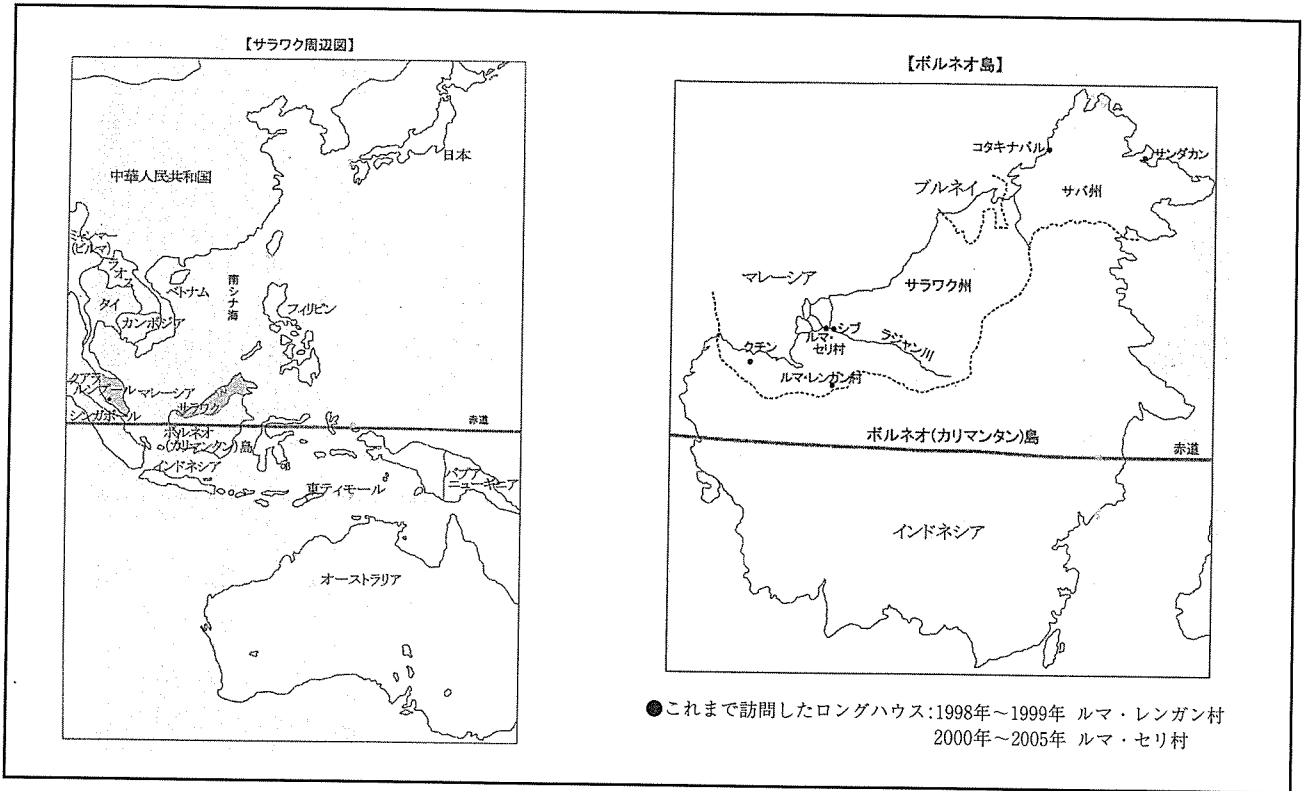


図2 ルマ・セリ村の全体図

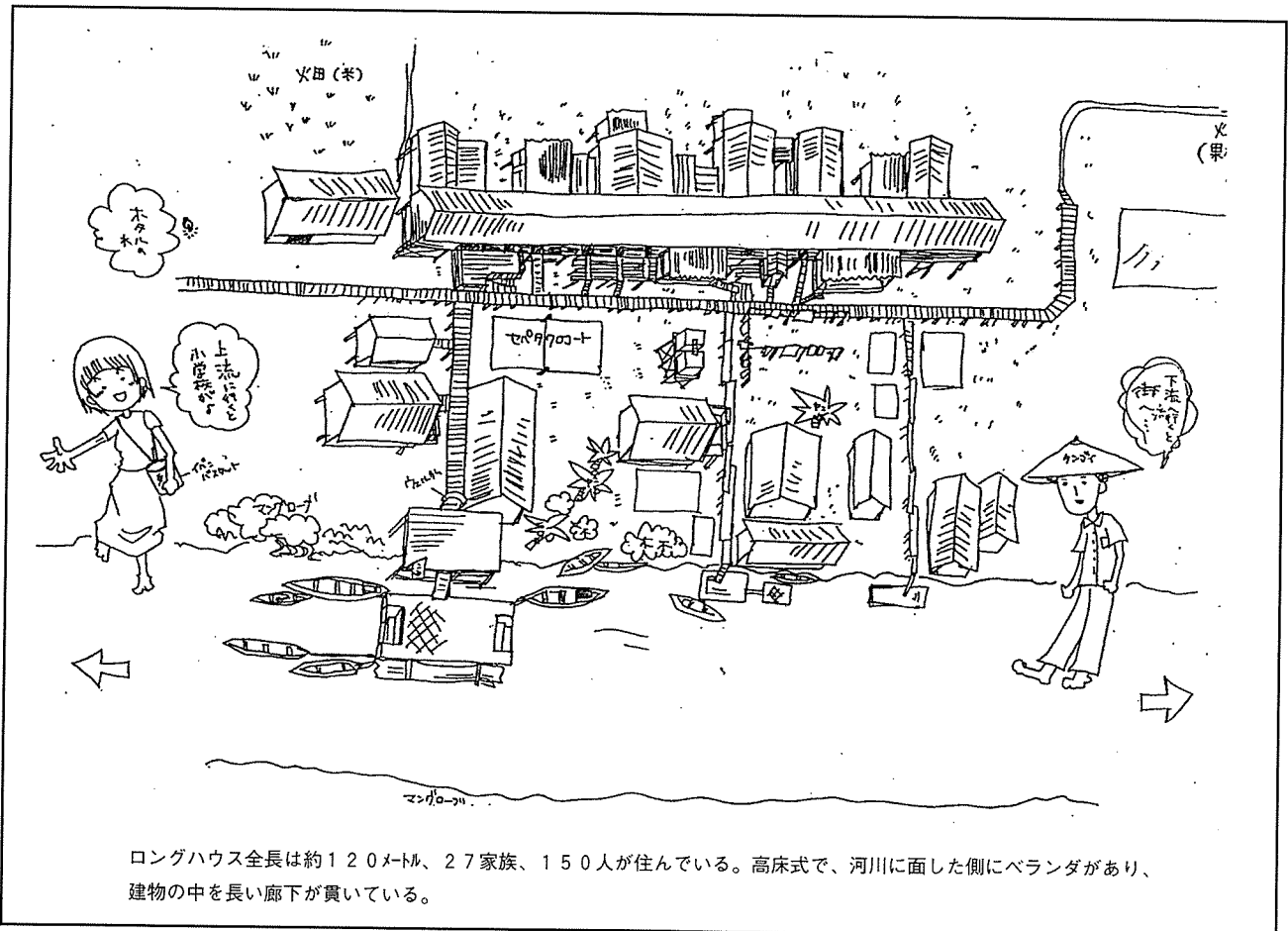


表1 事前学習〔12月～7月〕

テーマ	活動内容	形態	教材	ねらい	時間	
課題設定	1. ツアーの概要	ツアーを選択するにあたって、事前学習、現地学習、事後学習のプログラム、スタッフ、ロングハウスの生活について概要を理解する。	説明、先輩による体験談	ガイダンスの資料	明確な問題意識をもってツアーのプログラムに参加する。	1
	2. 課題学習	参考文献やホームページを使って、サラワク、イバンの文化と社会、日本とのつながりについて学習する。	個人学習、テスト(面接、筆記)	課題用紙、参考文献、ホームページ	ツアーに参加する意義や目的について考え、問題意識を深める。	家庭学習+2
	3. テーマの設定	事前学習終了時に、1人ひとりが現地学習で学んだテーマを設定し、皆の前で発表する。	個人学習、発表会	テーマ記入用紙	明確な問題意識をもって現地学習に参加する。	家庭学習+1
	4. 報告集の執筆計画	報告集の目的と内容、取材の観点・方法、執筆方法について理解する。イバンの文化・生活に関してテーマを設定する。	話し合い	取材・執筆の心得、記録用紙、過去の報告集	取材・執筆活動を通して、ロングハウス滞在期間中のイバンの文化・生活についての理解を深める。	1
生徒間の交流	5. 自己紹介	参加者同士が、名前とイバンネーム、自己アピール、ツアーで学びたいこと、ツアーで心配なことを発表する。	ワークショップ	A4用紙	ツアーに対する1人ひとりの思いを共有することによって、生徒間のコミュニケーションを図る。	1
		参加者同士が、「もの」を使って自分を紹介する。	ワークショップ	各自が選んだ「もの」	お互いの生活や考え方を共有することで、生徒間のコミュニケーションを図る。	1
	6. 旅行の運営	ツアーを運営するために必要な役割を分担し、それぞれの活動を行う。	話し合い・係活動	役割分担表	ツアーを運営するための自分の役割を理解し、主体的に参加する能力を育む。	自主活動
	7. 旅行の準備	現地学習のスケジュールと活動内容、ロングハウスの生活、持ち物、健康・安全面での留意点について学習する。	話し合い	ツアーのしおり	現地での生活を準備し、自分とグループの安全・健康を管理する能力を高める。	3
	8. 新聞作成	毎回のミーティングの内容、ツアーの運営、インタビューなどからなる新聞の作成・配布。	新聞発行	新聞	学んだことを整理し、まとめることで、学びを深化させ生徒間のつながりを深める。	自主活動
サラワクの文化と社会	9. 日本紹介	ロングハウスでの日本紹介のプログラムについて話し合い、準備する。カルチャーボックスに入れる物を選び、説明を考える。	話し合い・練習	カルチャーボックスに入れる「もの」	自文化に対する理解を深め、イバンの人にとっても生徒にとっても意味のある交流方法を考える。	3 自主活動
	10. マレーシア入門	マレーシアとサラワクの文化・社会・歴史について学習する。	ワークショップ、説明	漫画、スライド、資料	マレーシア社会の特徴と課題を理解する。	3
	11. イバン文化入門	イバンの文化、ロングハウスの生活について主な特徴を学習する。	説明	スライド、資料	現代の日本人とはかなり異なるイバン人の考え方や生き方を理解する。	5
	12. イバン語会話	イバン語の基礎的な会話について学習する。	説明・演習	イバン語テキスト、辞書	イバン語の基礎知識を習得し、言葉の背景にあるイバン文化を理解する。イバン語でコミュニケーションを図る意欲を高める。	6
	13. 熱帯雨林の生活	具体的な「もの」を通して、熱帯雨林に暮らす人々の生活を知る。	ワークショップ「熱帯林探検隊」	スライド、写真、サラワクの物	森と共に暮らす人びとの知恵に学び、熱帯林の生活への関心を高める。	2
社会	14. 熱帯雨林と日本のつながり	わたしたちの身の回りに熱帯地方からの「もの」がたくさんあることを学習する。	ワークショップ「生活の中の熱帯」	資料	熱帯は距離的には遠いが、「もの」のつながりから見れば身近であることを知る。	2
	15. 国際協力	今世界の中で起こっている出来事や問題がすべてつながっていて、相互に影響を及ぼし合っていることを学習する。	ワークショップ「ウーリーシンキング」	毛糸(10色)紙、マジック	1人ひとりが社会を変える力を持っていることに気づく。	3
		ツアーを運営しているNGO、AVCとSCSの活動を知る。	説明	資料	ツアーに協力するAVCとSCSの働きについて理解する。	1
	マングローブの特徴と状況について学習する。	説明	スライド、資料	現地学習で実施するボランティア活動、マングローブの種の採取と植林の異議を理解する。	2	

\*活動は平日と土曜日の放課後を使って行う。

表2 現地学習〔10日間〕

●日程表〔2005年度〕

月日	旅行日程	宿泊
7/23	広島駅～福岡空港～クアラルンプール～クチン	
7/24	クチン散策（サロン購入）／サラワク博物館見学／アブラヤシ・プランテーション、パーム油搾油工場見学／サラワクで生活する日本人の話	クチン（ホテル）
7/25	マレー人民家見学／モスク見学／日本人墓地見学／シブに移動／アジャさん宅で歓迎パーティ／夜店訪問	シブ（ホテル）
7/26	SCS事務所訪問／合板工場見学／朝市見学／ルマ・セリ村へ／入村セレモニー（儀式でプタを絞める）／ホームステイ家族の紹介／生活オリエンテーション（水、トイレなど）／初めてのマンディ（水浴）／廊下で夕食／歓迎パーティ	ルマ・セリ村（ホームステイ）
7/27	マングローブ苗床保管用倉庫の建設／自由選択プログラム（漁業・小学校訪問・イバンバスケットづくりなど）／文化交流ワークショップ（カルチャーボックス）／イバンの人と一緒に「よさこいソーラン」を踊る	
7/28	エキスプレスボートでラジャン川下流へ／マングローブの種子集め／野外で昼食／ホテル観察	
7/29	マングローブ苗床づくり／日本食づくり（炊き込みご飯、団子）イバン人と日本人の相互インタビュー／イバングダンス／カエル捕り	
7/30	農園・果樹園見学／ジャングルウォーキング／さよならパーティ（ラニヤイの儀式、よさこいソーランなど）	
7/31	ロングハウスを出発／エキスプレスボートでシブへ／アジャさん、SCSのメンバーとの昼食会／クチンに移動	クチン（ホテル）
8/1	振り返りミーティング（シート記入、スピーチ、コメント）／クチン市内自由散策／クアラルンプールに移動	機内
8/2	関西空港～広島駅	

●学習内容

テーマ	活動内容	活動場所	ねらい	
マレーシア サラワクの 文化	多民族・多文化共生社会（マレー系・中国系・インド系）についての学習 サラワクの先住民文化、自然についての学習	マレー人住居地域、モスク、チャイナタウン、中国寺院、インド人街、ヒンズー寺院、サラワク博物館	クアラル プー ル クチン	●イバンでの生活体験の準備として、マレーシアとサラワクの文化・自然の特徴を理解する。
日本とサラ ワクのつな がり	合板工場の見学 熱帯林の再生活動についての体験 油ヤシ・プランテーションの見学 サラワクの自然環境についての観察	合板工場 植林研究所 アブラヤシ・プランテーション 森、川		
イバンの 生活	生活オリエンテーション ホームステイ ロングハウスコミュニティの活動 儀式（入村・歓迎、送別） 料理（食材採集、調理） 産業（農業、漁業、手工芸） 文化（音楽・ダンス・民族衣装、スポーツ・遊び） 小学校訪問 自然観察（川・ジャングル） 交流・日本紹介 自由プログラム（籠づくり、農耕、漁業、料理など） イバン語レッスン ロングハウス住民へのインタビュー	各ビリック（家族の部屋） 各ビリック ルアイ（廊下）、屋外 屋外、ルアイ 畑、森、川、ビリック、ルアイ 畑、川、ルアイ ルアイ、屋外、セバタクローのコート 小学校 川・森 ルアイ ルアイ、ビリック、川、小学校 ルアイ ルアイ	ルマ・ セリ村	●自然の中で共同生活をしているイバンの人々の文化を体験することによって、人・社会・自然とのつながりを理解する。 ●イバンの人々との交流を通して、多文化と共生する能力を高める。 ●イバンの社会が直面する課題についての理解を深める。
SCSの 活動	SCSメンバーとの交流会 SCSの活動についてのレクチャー ボランティア活動（植林、橋づくりなど）	SCS事務局長宅 ルアイ 各家族の畑	シブ ルマ・ セリ村	●イバンの人々の生活改善に取り組むSCS、それをサポートするAVCの活動を理解することによって、社会活動や国際協力活動への関心を高める。
活動の 計画と 振り返り	活動内容の打ち合わせ 活動の振り返り	ロングハウスのルアイ、ホテル ロングハウスのルアイ、ホテル	ルマ・ セリ村 クチン	●活動の計画・振り返りを通して、体験からの学びを整理し深める。



表3 事後学習〔8月～12月〕

テーマ	活動	形態	教材	ねらい	
学びの振り返りと分かち合い	体験の振り返りと分かち合い	ツアーの活動、成果、イバンでの生活、イバンの人々との交流、日本に戻ってからの生活等についての振り返りと分かち合い。自分にとってツアーが意味していることを3つのキーワードで表現する。	シートの記入 話し合い 発表	振り返りシート カード 白板（掲示用）	●体験を振り返り学びを分かち合うことによって、自分と他者の共通点や相違点を発見し学びを深化させる。 ●現地学習での学びや発見を他者に伝えることによって、体験からの学びを整理する。
	帰国後の振り返りと分かち合い	「イバンと日本の生活について気づいたこと」「ツアーの体験をこれからの生活にどう生かすか」についての話し合い。	話し合い 発表	個人用シート グループ用シート 白板（記録用）	●帰国後の生活の中で生まれてくる考え方や気持ちの変化を共有して、イバンで学んだ価値観を自分の生活の中に生かす。
	事後学習での学びの分かち合い	事後学習を通して学んだことについての分かち合い。	話し合い	報告集	●事後学習での学びを共有することで1人ひとりの学びを深化・発展させる。
学びの発信	中学生へのイバンについての授業	中学1年「地理」と中学3年「グローバル・ラーニング」の各クラスに分かれて、イバンについての授業を行う。授業で扱われる主な内容：マレーシアのイメージ/ロングハウス食事、マンデイ、労働/川のよごれ（材木の伐採）/教育（小学校）/現地での生活と心情の変化、豊かさとは、逆カルチャーショック/食物/命・共生/感謝/日本とサラワクのつながり/マングローブ/パーム油	説明 質疑応答	サロン/地図帳/マンデイなどイバンの生活を説明したプリント/ロングハウスの全体図/写真パネル/イバンバスケット/パーム油を使った商品	●イバンの文化・社会、体験からの学びを中学生に伝えることによって、自分の体験を新たな視点で整理し直す。 ●授業内容・方法を工夫することによって、プレゼンテーション（情報発信）能力を高める。 ●中学生は、高校2年生による授業を通して東南アジアの学習に現地の感覚を加えたり、日本とサラワクのつながりを理解する。
	報告集の作成	体験からの学び、イバンと日本の文化・社会の比較、イバン文化の観察レポート、ツアーの活動記録。	執筆 編集 発行	フロッピー 写真・イラスト	●体験を振り返ることによって学びを整理する。仲間の体験や学びを知ることによって学びを深める。
	外部団体での発表	「サラワク・スタディーツアー」の報告。高校生、大学生、教育・NGO関係者を交えての意見交換。	報告 質疑応答 交流	ロングハウスの全体図/スライド/パネル/サロン	●ツアーやNGO活動に関心のある学生や社会人に体験を発信することで、体験の意味を深め、社会とのつながりを深める。
	文化祭の企画	写真展示、ロングハウスの模型展示、報告集の販売、ツアーのビデオ上映、工芸品の展示、イバン音楽、ダンスの紹介、マレーシアの菓子販売、SCS支援のための募金活動。	製作 展示 交流	写真のパネル/ロングハウスの模型/報告集/ビデオ/音楽/手工芸品/菓子/募金箱	●ロングハウスの模型やイバンの写真パネルを製作することによって、またイバンの体験を伝えることによって、体験からの学びを整理、発展させる。

## Janda Baik村

### 1. 概況

■人口：約850人

■民族構成：マレー人(90%)、中華系(6%)、インド系(2%)、その他(2%)

■ロケーションおよび村の概要：

クアラルンプール市内から、北東に約35キロ、海拔1500～4500フィートのところに位置し、年間を通し、20～25度といった比較的涼しい気候に恵まれている。

主な産業は農業(野菜、果物等)。牛ややぎ、にわとり、淡水魚の養殖等で生計を支えている農家も多い。

村内には、警察、クリニック、モスク、小学校、中学校があり、道路状況も比較的整備され、大型バスの通行も可能。

同村のまわりには、5000エーカーを越える熱帯雨林が広がっており、さまざま種類の植物や鳥類の宝庫となっている。



### 2. 訪問のねらい

ホームステイを通して、マレーシアの人びとの生活、文化、社会を理解する。

日本の文化を紹介することにより、日本・マレーシアが相互に学びあえる関係を築く。



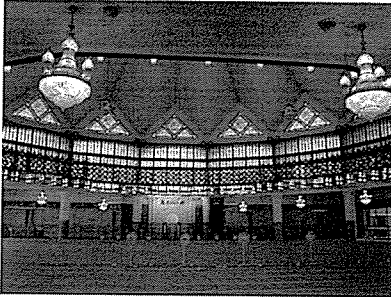
### 3. みるべきポイント

- ・ マレーシアの農村生活の実情
- ・ イスラム教徒の生活実態

## 国立モスク、チャイナタウン、中国寺院、ヒンドゥー寺院

### 1. 概況

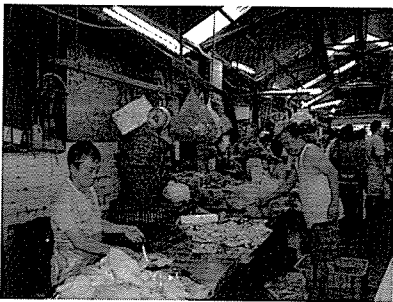
#### ■ 国立モスク (Masjid Negara/National Mosque)



1965年に建てられた国立モスク。東南アジア最大規模で、約8000人収容可。高さ73メートルのミナレット(光塔)がそびえ建つ、傘のような屋根のデザインが特徴で、伝統的なイスラム芸術や装飾などを現代的にアレンジした造りになっている。

入館の際は、肌の露出を避け、靴は入り口で脱ぐこと。女性は入口で貸し出されるローブとスカーフを見につける。

#### ■ チャイナタウン



早朝から深夜まで、飲茶や屋台で埋め尽くされる活気のあるエリア。フルーツから、Tシャツ、靴、時計、CD等品揃えは様々。常に地元民や観光客でごったがえしている。中国茶のお店や中華レストランや屋台も軒を連ねる。

#### ■ 陳氏書院(中国寺院)

陳氏一族の祖先を祭った霊廟として知られる中国寺院。建てられた当時は陳氏の私邸として使用されていた。さまざまな中国の建築様式が使用されており、特に中国の神話をモチーフにして描かれた外壁などが特徴的。

#### ■ スリ・マハマリアマン寺院(ヒンドゥー寺院)



クアラルンプール最大のヒンドゥー寺院。チャイナタウンの中心にあり、門塔の上部に数多くのヒンドゥー教の神々が神話に基づき彫られている寺院。建設は1873年。その後修復を繰り返し現在に至っている。寺院内にある、二輪の馬車はヒンドゥー教の祭り、タイプーサムが行われる際に、信者とともに運ばれる重要なものである。

### 2. ねらい

マレーシア社会が多民族・多文化から構成されていることを理解する。

### 3. みるべきポイント

- ・ 多民族／多文化共存の様子
- ・ マレーシアの下町、庶民の生活
- ・ マレー、中華、インド系のさまざまな違いや共通点等を食べ物や建物、買い物等を行うことによって実感する

ボルネオ生物多様性保全・生態系保全プログラム  
(BBEC/ Bornean Biodiversity and Ecosystems Conservation programme)

## 1. 概況

協力期間：2002年2月から2007年1月まで(5年間)

実施機関：サバ州政府、サバ大学

プロジェクト内容：同プロジェクトは、サバ州の生物多様性および、生態系の保全のため、研究・行政・環境啓発を統合化した、自然保全のための包括的な手法、体制が持続可能な形で設立されることを目的としている。同目的のために、1)研究教育、2)州立公園管理 3)野生動物生息地管理 4)環境啓発 の4つのコンポーネントを有機的に組み合わせ、主に以下の取り組みを行っている。

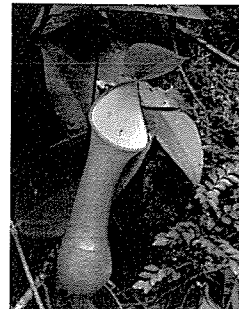
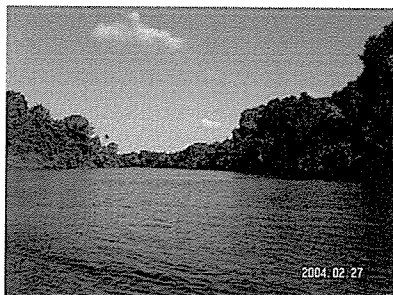
- ・ 現地の人々の理解促進
- ・ 自然保護区の整備
- ・ 生物・生態系の研究
- ・ 野生動物の保護
- ・ 行政の自然管理能力の向上

## 2. ねらい

- ・国際協力の現場を学ぶ。
- ・自然保護の大切さと経済活動の必要性、両者のよりよい共存関係について考察する。
- ・熱帯雨林とともに生きる住民の生活を通し、持続可能な開発について考え、身近な生活と熱帯雨林との繋がりを理解する。
- ・熱帯雨林の現状と、自分・日本・世界のつながりを理解する。

## 3. みるべきポイント

- ・ JICA 技術協力プロジェクトの現状。
- ・ マレーシアの人々、自然・環境保全のために働いている日本人およびマレーシア人の姿を通して、両国の協力関係、つながりについて考察する。
- ・ サバ州の多様性ある自然の様子、および熱帯雨林の現状。
- ・ プランテーション開発や木材伐採等の経済開発の実状。



## 青年海外協力隊員の活動視察

### 1. 概況

マレーシア国において、青年海外協力隊は派遣後40周年を迎え、これまでの派遣総数は1150名を数える。現在も32名の隊員が主に福祉、環境分野で活躍している(2006年3月現在)。この他にも、食品加工や木工といった職種において、青少年の育成、就労支援等に協力を行っている。

### 2. ねらい

- ・ 国際協力の現場を学ぶ。
- ・ マレーシアで活動する日本人との出会い。
- ・ ボランティア活動がどういうものかを知る。

### 3. みるべきポイント

- ・ 日本の若者がいかに草の根レベルで国際協力を行っているか。
- ・ マレーシアの人々がどのようにボランティア活動を受け止めているか。
- ・ 協力隊の活動がその地域／現場にどのような影響を与えているか。

## マレーシアスタディーツアー 振り返りシート

1. ホームステイについて感想を書いてください。

① 食事

② 生活全般

③ 体験 [ ]

④ 困ったこと

⑤ 日本との違いを一番感じたこと

⑥ ホームステイでの過ごし方(個人的に)

a. 良かった点

b. 反省点

2. 街での生活について感想を書いてください。

①モスク、ヒンズー寺院、中国寺院

②( )さんの話

3. 修学旅行を通して得たものは何ですか？

4. この修学旅行は、私の生き方や進路にどのような影響を与えましたか？ 体験を今後の生活にどのように生かしていこうと思いますか。

5. マレーシアと日本、あるいはアジア・世界と日本とのつながりについて、どのようなことに気づきました。

6. 修学旅行では、自分が設定したテーマがどのように達成されましたか？(達成できた点、達成できなかった点など)

テーマ ( )

7. 来年の参加者にどのようなことをアドバイスしますか。



## マレーシア教師海外研修旅行 振り返りシート

1. ホームステイについて感想を書いてください。

① 食事

② 生活全般

③ 体験 [ ]

④ 困ったこと

⑤ 日本との違いを一番感じたこと

⑥ ホームステイでの過ごし方(個人的に)

a. 良かった点

b. 反省点

2. 街での生活について感想を書いてください。

①ボルネオ生物多様性生態系保全プログラムの視察

②アブラヤシプランテーション見学

③合板工場見学

④NGO活動見学

⑤多民族社会の観察

3. 研修旅行を通して得たものは何ですか？

4. この研修旅行は、私の生き方や仕事にどのような影響を与えましたか？ 体験を今後の生活や仕事にどのように生かしていこうと思いますか。

5. マレーシアと日本、あるいはアジア・世界と日本とのつながりについて、どのようなことに気づきました。

6. 研修旅行では、自分が設定したテーマがどのように達成されましたか？（達成できた点、達成できなかった点など）

テーマ（ ）

7. 来年の参加者にどのようなことをアドバイスしますか。

